病院図書館　2015;35(1):3-4

小特集　コメディカル部門を知る 其ノ肆

メディカルソーシャルワーカーは何をする人ぞ？

平田　直子

Ⅰ．はじめに（カメレオンのように）

「ソーシャルワーカー」「相談員」「ケースワーカー」……。呼び方はいろいろありますが、病院で働く私たちメディカルソーシャルワーカー（以下、MSW）は、医療機関で働く「唯一の福祉職」です（MSW は、社会福祉士の資格を持っている場合が多いです）。

患者さんは、病院では「患者さん」でも、一歩外に出れば、病気やけがとともに「生活する人」になります。私たち MSW は、その方たちが自分らしく生活できるよう一緒に考える役割を担っています。

「生活すること」を組み立てる場合、医療的なことだけでなく、経済的なこと、その人をとりまく社会的なこと（家族関係や使える制度があるか否かなど）を同時に考えていく必要があります。具体的にアセスメントし、必要なモノ・ヒト・カネなどをコーディネートすることが MSW の役割です。

現在の医療制度では、医療機関はそれぞれ「役割」が異なっています。救急医療を担う病院、専門的なリハビリテーションを担う病院、療養を担う病院、そしてホスピスなど、それぞれのステージに応じた患者さんに必要な医療を提供しています。

所属する医療機関の役割によって必然的に MSW の担う役割も変わってくるというわけです。例えば急性期病院に所属していると、継続治療先や療養先を探すことが多くなりますし、リハビリテーション病院に所属していると、住宅環境設定などを行う自宅退院支援が多くなります。

私自身は、急性期病院に勤務しているので、患者さんの療養先を探すお手伝いが多いです。主として転院先を探すことが多いのですが、ご存じのとおり、医療制度上の要求として在院日数の短縮を強く求められていることもあり、患者さんやそのご家族にご無理を強いている現状もあります。「納得」まではいかなくても少しでも「理解」をしていただけるよう、私たち MSW も日々努力をしているのが現状です。

少し話が脱線しましたが「コーディネート機能を主軸としながら、所属する機関や患者さんの状況に応じて役割がその形をかえていく」のが私たち MSW だと思います。

Ⅱ．医療機関で「ソーシャルワークをする」ということ

医療機関ではさまざまな専門職がそれぞれの専門性をいかしながら働いています。

個々の専門性がバラバラに提供されているわけではなく、それらがさまざまな形で結びついて、患者さんに提供されています。

MSW が患者さんの生活支援をする場合、医師や看護師だけでなく、薬剤師やリハビリセラピストなどいろいろな職種の方の力をお借りしています。患者さんをアセスメントし、必要なことはなんなのか、誰にどのようなことを相談し、協力を依頼したらよいのか。それはすべて、患者さんの生活を支えるために必要なことであり、私たち MSW はそれらがスムーズにできるよう日頃から多職種とコミュニケーションをと

ひらた　なおこ：関西労災病院　医療連携総合センター

り、相手の仕事のことをよく知っておく必要があります（ですので『コメディカル部門を知る』のコーナーはとても役立ちます）。

MSW は、それぞれの専門性を「結びつける」という役割を担いながら、患者さんの支援を展開しているといえるでしょう。

また、患者さんの生活支援をする場合、医療機関内の「結びつき」だけでは足りません。

生活をサポートしてくれる制度や関係機関やその他もろもろのコーディネートも必要になってきます。なぜなら「生活」は医療という要素だけで構成されているわけではないからです。医療機関でソーシャルワークをするということは、医療機関以外のさまざまなものをソーシャルワークすることと表裏一体だと思います。

Ⅲ．飛び出す絵本ならぬ、地域へ飛び出せ!!

日本は諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行しています。現在、65 歳以上の人口は、約 3,000 万人を超えており（国民の 4 人に 1 人の割合だそうです）、今後も増加することが予想されております。2025 年には団塊の世代が 75 歳を迎え、今以上に医療や介護の需要が増加することが見込まれています。

そこで、国が打ち出してきたものが「地域包括ケアシステム」です。

高齢者が自身の尊厳を保持しながら、可能な限り住み慣れた地域で生活を継続できるようにさまざまな側面から包括的に支援する仕組みです。

加齢に伴う諸問題とともに生活する場所は、「（自分の住み慣れた）地域」であるという概念の下、「介護」「医療」と「保健」が一体となり、生活支援を提供することになります。つまり、舞台も「地域」へと移行し、病院や施設などの中だけで支援が完結できなくなっていくと考えられます。MSW は医療機関でのみソーシャルワークをするという既成概念を超えた実践が求められることになります。

Ⅳ．まとめにかえて（図書館とわたし）

当院に就職したとき「こんなにりっぱな図書室があるんだなぁ」と感動したのが昨日のことのようです。

司書の寺澤さんも丁寧に説明してくださり「本のリクエストがあったら言ってください」とお言葉をいただいたのを鮮明に覚えています。

MSW という職業柄、医療の知識を学ぶことは不可欠ですので、医学の書物がたくさんあって、かつ院内にあるというのは本当にありがたいと感じます。ネット社会は便利ではありますが、やはり、書物を読むという行為で得られる知識と充足感はインターネットでは得られないと思います。

また、困った時に相談にのってくださる司書の存在もすごく大事だと思います。

「相談する」→「アドバイスをもらえる、一緒に考えてもらえる」→「学ぶ意欲も向上する」というプラス効果がある当院の図書館。いつも頼りにしています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。